
夜兎と人の血

獅兎羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜兎と人の血

【Nコード】

N5184Z

【作者名】

獅兔羅

【あらすじ】

万事屋銀ちゃんのオーナー坂田 銀時。

そんな、彼の元に一人の青年がやってくる。

そして、高杉が江戸に・・・。

神威が・・・。

桂が・・・。

辰馬が・・・。

新八と神楽が・・・。

第零訓 自分の血（前書き）

初の投稿です。

獅兎羅っです^^

神威、高杉、銀時バ力です。

神威と高杉が出すぎるかも・・・。

残酷な描写がある話もあります。

第零訓 自分の血

俺はなんでここに存在してしまったんだろう。

攘夷戦争に出て知った。

俺の真実を・・・。

天人を倒すために参加したのに・・・。

俺の血が楽しんでいる・・・。

殺すことを楽しんでいる。

心から・・・。

楽しんでいやがる・・・。

殺すことを楽しむために参加したんじゃない・・・。

なのに、なのに・・・。

俺の血は一体何なんだ・・・？

そこで知った俺の出生の秘密を・・・。

俺は・・・。

「夜兎」

だっ たんだ・・・。

人間と夜兎の・・・

子供だっ たんだ・・・。

俺は生まれてきたことが間違ひなんだ。

俺の血は

穢れている・・・。

第零訓 自分の血（後書き）

どうでしたか？

いきなりオリキャラ出しちゃいました・・・。

次はどうなるかな・・・。

感想よろしく願います^^

第一訓 お母さん発言は20歳から(改)(前書き)

2話目書けました。
結構つかれた。

第一訓 お母さん発言は20歳から（改）

「新八、出勤しました。」

いつものように朝から新八の声が響く。
ここは万事屋銀ちゃん。

「神楽ちゃん、起きて。」

新八は押入れを開ける。

「・・・あと5時間・・・。」

「そんなこと言わずに早く起きて。」

新八はそう告げ、隣のふすまを開ける。

「銀さん、早く起きてください。」

「もう少し寝かせろよ。今日はお天気お姉さんもないんだから・・・。」

新八はため息をつく。

「はあ。銀さんもいい大人なんだから一人で起きれるようにしてください。」

「んなもん知るか。つーか新八、お母さん発言は20歳になってからだろ。」

「そうアルヨ。だからお前は新一じゃなくて新八ネ。なんだよばちつて。」

そんなこと言うのはいつの間にか起きてきている神楽だ。

「そんなもんは原作者に言え！僕に言われてもわからないよ。」
「なに？ワンパークの人にいうの？」

と銀さん。

「ちげーよ。銀魂のだよ。銀魂の。ワンパークの人に言ったら全然わからないでしょ！」

「んなもん分かんないよ。もしかしたら知ってんじゃないか。」

「そんなわけあるか！！」

「つーか騒いだせいで目が覚めちまったよ。どうすんだ。」

ダルそんな眼をした銀時が言った。

「どうすんだじゃないわー！」

新八のつつこみ。

「わーったよ。起きりゃいんだろ。」

あれこれあったが新八は銀時と神楽を起こすことに成功した。

「って、これなんのミッション？作者さん。」

第一訓 お母さん発言は20歳から(改)(後書き)

どうでしたか？

新八ってこんなん？って思いながら書きました。

結構似てない・・・かも。

第二訓 インパクトが強い奴でも忘れるときは忘れる（前書き）

第一訓、読んでみて・・・
メッサ読みにくい・・・。
すいませんでした。

第二訓からは少しか改善されました。

第二訓 インパクトが強い奴でも忘れるときは忘れる

「暇だあゝ。依頼ねえーのか？」

銀時がぼやく。

「ぼやかないでください。大体いつも全然来ないじゃないですか。」

新八の正論。

万事屋「なんでも屋がこの万事屋銀ちゃん。」

そのため、怪しがるのか・・・依頼はほとんどこない。

「仕方ないネ。私と銀ちゃん以外の従業員がダメガネだからナ。」

毒舌発言の神楽。

「依頼来ても大体僕しか働いてないよ、神楽ちゃん。」

「それが雑用の仕事アル。」

またも、毒舌発言の神楽。

「さつきと矛盾してる。」

と新八。

プルルルル、プルルルル。

「あつ電話アル。」

「お、依頼か？」

銀時は電話に出る。

「はい。万事屋銀ちゃんです。」

『外に出なよ。』

「はあ？」

『いいから外に来て。』

その声は男らしいが子供っぽく、声が高かった。

「オメーはいつてえ誰だ？」

『……』

プツ。

電話が切れた。

（なんだ今の……）

「銀さん、誰からですか？」

「わかんねえ……。」

新八と神楽が顔を見合わせた。

（さっきの声どつかで……）

銀時は玄関の方へ歩いて行った。

その後ろに新八と神楽も続く。

ガララララ。

銀時たちが外に出ると屋根の上から人が降りてきた。
その人は傘をさし、赤と黒の着ものを着ていた。
神楽が驚いた顔をしている。

「銀さん、あの傘。」

銀時も驚いた顔を見ている。
前に居る人は夜兎の傘をさしていた。

その人は傘を上げる。
その顔は髪の色がオレンジで、眼の色が青かった。
これは完ぺきに夜兎の特徴とかぶっている。

「久しぶりだね。銀時。」

そう言った青年の顔を見ながら銀時はまだ驚いた顔をしている。

「忘れちゃった。じゃあこれ見たら思い出すかな？」

そう言うと青年は懐から兜割を取り出した。
それを見た銀時は何か思い出したようだった。

「おめーは……。」

第二訓 インパクトが強い奴でも忘れるときは忘れる（後書き）

どうでしたか？

これからどうなる事が・・・
自分でも心配です。

感想、よろしく願います。

第三訓 監察はすげー（前書き）

第三訓までいきました。

今回は真選組中心でいきました。

沖田のキャラを作るのが大変でした。

第三訓 監察はすげー

「高杉が江戸に!？」

真選組の屯所に近藤の声が響いた。

「はい。俺らが仕入れた新たな情報です。」

「ほお。あの野郎、今度は何を企んでやがる。」

土方が呟いた。

「なんでも、攘夷戦争に参加していた人を探しているとか……。」
「攘夷戦争か……。旦那も参加してやしたよね。」

沖田が言った。

銀時は真選組と見廻組との争いの時に自分が白夜叉だとばらしている。

土方が口を開いた。

「ああ。それも、桂や高杉に並ぶほど強かったという白夜叉だったらしいしな。」

そして、呟いた。

「後の有名どころは坂本 辰馬と戦場の獅子かあ。」

「坂本 辰馬は快援隊の隊長。でも、戦場の獅子って一体誰なんですかね？」

「さあな。まっ獅子なんて言うからけっこう強いだろうな。」

土方は言った。

「そう言えばその高杉。一人のガキを連れ歩いているらしい……。」

「ガキ……。」

近藤は呟いた。

「はい。なんでも夜兔の特徴とかぶってるらしいです。」

山崎は言った。

「夜兔な……。万事屋のこのチャイナも確か夜兔だよな。そこに行くのが手っ取り早いな……。」

「なっ、万事屋に行くのかよ？」

土方が嫌そうな声をあげた。

「俺もいやですよ。大体あのチャイナとなんか会いたくないですぜイ。」

沖田も嫌そうな声を出した。

「仕方ない。夜兔のことや、高杉のことを知ってんのは万事屋の奴らしかいないんだ。」

近藤がそう言うと、沖田も土方も承知したらしい。
ゴリラでも人望は厚い……。

「俺、ゴリラじゃないし。作者さん！」

第三訓 監察はすげー（後書き）

どうでしたか？

真選組のキャラは・・・

つくりづらい！！

でも、自分的にも真選組は好きだからこれからも色々出していきます。

第四訓 お金は必要なもの（前書き）

第四訓だよ。

銀さんと神楽と新八と・・・

あの青年が中心。

第四訓 お金が必要なもの

「銀さんの知り合いなんですか？」

万事屋に新八の声が響いた。

「まあーな。」

青年は髪をポニーテールにっていて、ぱつと見、青年時代の土方ぐらい。

だが、神楽だけは警戒を解けきってないらしく、じつと青年のほうを見ている。

「俺、伊達 柚兔。歳は25。」

柚兔は笑いながら言った。

「なんで、夜兔の特徴を持ってるアル力？」

神楽は警戒した目を浮かべながら言った。

「俺が夜兔だからだよ。完ぺきな夜兔じゃないけどね。」

「どういう意味アル力？」

神楽は不思議そうな眼をしながら柚兔に聞いた。

「俺さあ、夜兔と人のハーフなんだよね。半分が人の血でもう半分が夜兔の血。」

「ハーフ!？」

新八と神楽が声をあげた。

「そう。まあ髪の色と眼の色、そして日に弱いところは夜兔譲り、人譲りってなにかわかんないけど、たぶんなんかあるんだろーな。」

銀時が口を開いた。

「つーか、なんでいんのよ？」

「いちゃだめ？」

「別にいいけどよ。」

「あの・・・ひとつ聞いていいですか？」

新八が言った。

「いいよ。なんでも聞いて。」

「じゃあ、柚兔さんはいつ銀さんに会ったんですか？」

柚兔は少し顔を曇らせたが、すぐ笑顔になり言った。

「攘夷戦争って知ってる？銀時とはそこで会ったんだ。」

「知ってます。20年前に起きた天人との戦の事ですよね。」

新八が言った。

「そう。まあ俺らが戦ったのは終わりごろだけだな。ヅラや晋助や辰馬ともそこで会ったんだよ。」

そう言う柚兔はどこかうれしそうだ。

「つーか柚、オメーここに泊るき？」

銀時が言った。

「まあね。つーことで、居候させて。」

「なに勝手に決めてんだ。」

「別にいいじゃん。居候ぐらいさあ。」

（柚兔さんって以外と・・・自己中。）

「つーことで、よろしく。」

「だから、勝手に決めんな！」

そこで新八が口を開いた。

「まあ、いいじゃないですか。僕、志村 新八です。」

「私は神楽ネ。夜兔アルヨ。」

「じゃあ、よろしく。神楽に新八。」

銀時が困った顔をしている。

「俺んどこ、もう金がないんだけど・・・。」

「気にしない、気にしない。」

そんなことで夜兔と人のハーフの柚兔を居候させることになった万事屋銀ちゃん。

家計のほうは大丈夫なのだろうか・・・。

「大丈夫じゃないわ〜！」

第四訓 お金は必要なもの（後書き）

どうでしたか？

昨日の夜42巻読みました。

沖田と土方がカッコよかったです。

近藤はやっぱりゴリラだね・・・。

感想よろしく。

第五訓 いつまでたっても変わらない（前書き）

第五訓いきました。

お気に入り登録してくださった方々ありがとうございます。
今回は万事屋と柚兎中心です。

第五訓　いつまでたっても変わらない

「おはようございます。」

次の日。

新八が出勤してきた。

「おはよう。」

「柚兔さんは起きるの早いですね。」

昨日から万事屋に居候している柚兔は朝から椅子の上に座っている。

「銀さんと神楽ちゃんはまだ寝てますか？」

「寝てるよ。銀時は相変わらず朝寝坊だなあ。」

柚兔はどこか懐かしい感じで言った。

「昔から朝寝坊だったんですか？」

新八が聞いた。

「そう。戦時中もさ、戦争に遅れてくるは、会議に遅れるはで悩みの種だったんだよ。」

柚兔は呆れ顔で言った。

「おはようアル。」

神楽が起きてきた。

「おはよう。神楽ちゃん。」

「神楽、おはよう。よく眠れた？」

「ふあゝ。寝れたアル。」

神楽はあくびをしながら言った。

「寝むそうだね。」

「大丈夫アル。こんなのお茶の子さいさいネ。」

柚兎はそう言う神楽を見ながらにこつと笑った。

「おはあゝ。」

銀時が目を擦りながら起きてきた。

「銀ちゃん、起きるの遅いアル。」

そう言う神楽。

「神楽が言えることじゃないでしょ。」

笑いながら言う柚兎。

そして、銀時に向かって言った。

「そして、銀時もさっさと起きる。もう大人だろ？」

「へいへい。」

そう言う銀時。

そのあと3人（新八を抜く）は朝ごはんを食べて、ボーっとしてい

た。

「暇だ。」

「そうアルナ。」

ソファアの上でゴロゴロする銀時と神楽。
その時だった。

インターホンが鳴った。

「おつ、依頼か？」

銀時は玄関の扉を開けた。
そこに居たのは……。

「久しぶりですねイ、旦那。」

「税金泥棒。何しに来たんだよ。」

真選組の近藤、土方、沖田、山崎の4人だ。

「誰が税金泥棒だ。」

イライラしながら言う土方。

「で、何の用だ？」

「俺らが用あんのはオメーじゃねえ。あすここに転がってるチャイナ娘に用があんだよ。」

「神楽に？」

不思議そうな顔をする銀時。

「ああ。夜兔についてだ。」

転がっていた神楽とボーっとしていた柚兔が反応した。

「高杉のところに居る三つ編みのガキについてな……。」

（神威！）

第五訓　いつまでたっても変わらない（後書き）

どうでしたか？

真選組も出しました。

と、ここで・・・。

出てくる人の年齢など紹介します。

坂田	銀時	・	・	・	26歳
志村	新八	・	・	・	16歳
	神楽	・	・	・	13歳
伊達	柚兔	・	・	・	25歳
近藤	勲	・	・	・	29歳
土方	十四郎	・	・	・	26歳
沖田	総悟	・	・	・	18歳
山崎	退	・	・	・	25歳
桂	小太郎	・	・	・	26歳
高杉	晋助	・	・	・	25歳
坂本	辰馬	・	・	・	26歳
	神威	・	・	・	19歳
	阿伏兔	・	・	・	32歳

と、いう感じです。

感想よろしくお願いします。

第六訓 びっくり発言は驚くものだ。 (前書き)

第六訓です。

今回は真選組と万事屋、柚兔中心です。

第六訓　びつくり発言は驚くものだ。

「ほお。あの高杉のところにねえ。」

真選組を中に入れたあと銀時が呟いた。

「そうだ。チャイナ娘、なんか知ってないか？」

そう言う土方の眼はいつもながら鋭い。

神楽は下を向いている。

その様子を黙ってみる新八と銀時。

それに、柚兔。

「知ってるアル。あの片目野郎のところに居るのは……私の兄貴アル……。」

「兄貴!？」

真選組が声を上げた。

なんとなく予想は付いていた銀時と新八はやっぱりなという顔をしている。

柚兔は少し驚いてる顔をしているが、笑顔は崩していない。

「オメー、兄貴が居たのか……。」

驚いた顔をする真選組に対し、下を向く神楽。

「神威とかいう奴だっけ……?」

そう言うのは柚兔。

その発言を聞き、新八、銀時が驚いた顔になった。
神楽も顔を上げた。

「柚兔。オメーなんで名前を知ってる？」

銀時は驚きまくっている。

「ここに来る2日前、晋助に会った。つか呼び出された。」
「はあ!？」

真選組と万事屋メンバーが声を上げた。

「てか、オメー誰ですかイ？」

沖田が聞く。

「俺は伊達 柚兔、25歳。」

「おい。高杉となんかあんのか？」

土方のその眼はさっきより鋭さを増している。

「俺はただ、晋助やヅラや銀時や辰馬の知り合いつて事だけだよ。」

そのメンツを聞き、真選組は頭をフル回転させる。

「まさか・・・お前が・・・あの戦場の獅子か？」

その近藤の問いに対し、あっさり答えた。

「そうだけど。」

真選組が顔を見合わせる。

「晋助が呼び出したさいに、その神威ってヤローに会っただけ。以外に子供っぽいね。」

「お前が言えることじゃねえーだろ。」

銀時は柚兎に対し、冷静にツツコム。

「神威となんか話したアルカ？」

「うーん。あつ、俺が夜兎と人のハーフってことと、晋助らの知り合いつてことぐらい。」

その話を聞き、さらに真選組が顔を見合わせる。

「ま、この辺はさらっと受け流せ。」

銀時は真選組の空気を察し一言告げた。

「あとひとつ言っておく。あんま晋助を追い回すな。無駄死にするぞ。」

柚兎はあっさりそう告げた。

土方は柚兎の胸元をつかむ。

「お前、知り合いだからとか言う理由で庇ってんのか？」
「庇ってないよ。ただ俺はあいつが死ぬのを見たくない。」

それを聞き、さらにめが鋭くなる。

「もうひとつ言うと、誰も死んでほしくない。今のあいつの眼は復讐に走る哀れな獣の眼だ。今のあいつに立ち向かって勝てる奴なんか俺の知ってる限りで4人しかいねえ。」

その言葉を聞き、土方は柚兔の胸元を放す。

「その4人ってのは誰だ？」

「まずは俺。そして、銀時にヅラに辰馬だよ。」

土方はどう反応していいか分からなかった。

「ま、決闘になっても誰ひとり晋助を殺すことはしないね。」

そう言い銀時の方を振り向く。

銀時は目線をそらす。

「ま、いいさ。」

近藤が一言言い空気が少し和んだ。

第六訓　びつくり発言は驚くものだ。（後書き）

どうでしたか？

次あたりで・・・ツラと辰馬を出そうかな？

高杉はまだあとになりそう・・・。

感想もよろしくお願いします。

第七訓 人の家で争うな！（前書き）

第七訓です。

辰馬、桂、陸奥の初登場。

第七訓 人の家で争うな！

「で、その神威って奴はどういう奴ですかイ？」

万事屋内では真選組が居座っている。

「バカ兄貴は・・・強い奴を殺すことしか考えてない奴ネ。親だろ
うが妹だろうが手に掛ける奴アル。」

そう言う神楽は少し寂しそうだ。

「仕方ないんじゃないの。それが夜兔の本能。強き者の血を求め、
血のために生きる一族なんだよ。それが、夜兔なんだよ。」

柚兔はあっさりそう告げた。

「ゆずっちは・・・夜兔の本能が目覚めたことってあるアルカ？」

神楽は怯えたような眼を見せている。

「あるよ。」

柚兔は笑顔を崩さず言った。

「攘夷戦争の時になんども。」

周りの人は黙ってしまった。
その時だった。

ガララララ。

「銀時!!」

長髪が目立つ男が入ってきた。
そう桂 小太郎だ。

「桂あああ!」

沖田が叫んだ。

「おい、銀時。なんで真選組が居る?」

「桂ああああ!」

「いい加減にしろ。人んちで何やってんだ?」

銀時が声をあげた。

「よお、ヅラ。久しぶり。」

桂が顔を上げた。

「あつ、柚兔!? 貴様なんで居る?」

「居候してる。」

柚兔は笑顔で言った。

「つーかヅラ。お前何の用?」

銀時はヅラに聞いた。

「高杉のこと『ドガアーアーン』・・・ってなんだ？」

いきなり大きな音が屋根からした。

銀時らが上を向くとそこには見慣れた船が突っ込んでいた。

真選組が驚いた顔を上に向けている。

「アハハハハ。すまんのー金時。屋根壊してしもーた。」

銀時は眉間にしわを寄せた。

そこに居たのは無論いつものトラブルメイカー坂本 辰馬だ。

「辰馬！！お前は何度、人の家を壊したら気がすむ。しかも金時じゃない銀時だ。」

「坂本！！」 「辰馬！！」

桂と柚兔が同時に叫んだ。

「お、ツラに柚兔がが？久しぶりじゃの〜。」

真選組はいきなりやってきたモジャモジャ天パに驚いた顔を見せている。

「おい、万事屋。コイツ誰だ？」

土方が聞いた。

「ああ。坂本 辰馬。快援隊の隊長だよ。」

「え〜！！コイツが坂本 辰馬？」

真選組がさらに驚きの顔を見せた。

その時、辰馬の横から拳がとんできて、辰馬の顔面に当たった。

「ぐはっ。」

全員がその方向を向く。

「おまんらすまんの。頭が迷惑かけてスマンきに。」

一人の女がそう言った。
陸奥だ。

「すいませーん。」

玄関から女の声が聞こえた。

その声を聞き近藤が思いつきり反応した。

第七訓 人の家で争うな！（後書き）

どうでしたか？

辰馬はまた家を破壊しました。

ヅラはヅラだね。

感想よろしくお願いします。

第八訓 笑顔にも種類がある（前書き）

第八訓です。

今回はお妙さんがやってきて・・・
大変なことに・・・。

第八訓 笑顔にも種類がある

「お妙さん！！」

近藤が来訪した女に飛びつく。
それをあつさりとぶん殴る。

「ぐあああああ！！」

そして近藤が吹っ飛ぶ。

「近藤さん、いい加減にしてください。あの世に逝かせますよ。」

お妙が笑顔を崩さず言った。

「そう、銀さん。依頼持ってきたわよ。」

銀時たちが眼を光らせている。

「1日キャバ嬢の仕事手伝って。ここの居る人にも手伝ってもらおうかしら。」

全員の眼から光が消えた。

逆らっても無駄とこういうことは十分承知している。

「じゃあ、銀さんと新ちゃん、神楽ちゃん、沖田さん、山崎さん、ウザイ長髪の人、オレンジの長髪の人、笠をかぶった女の人はキャバ嬢。」

「姉上。あのなんでキャバ嬢なんかに？」

新八が恐る恐る聞いた。

「すまいるわね、年末年始も営業するのよ。でもね、キャバ嬢が旅行とかで減ってしまつて・・・それで思いついたの。銀さんたちにお願ひすればいいんだつて。」

お妙はニコニコ言つた。

「あの、男も紛れてるんですけど・・・。」
「いいじゃない。数が足りれば。」

（よくそんなこと言えるな・・・）

「仕方ないひと肌脱いでやろう。」

桂が言つた。

「あの・・・わしもキャバ嬢になるがか？」

男勝りの陸奥が言つた。

「そうよ。いいじゃないキャバ嬢ぐらい。」

反抗できない微笑を顔につけてお妙は言つた。

「あとは・・・近藤さんとモジャモジャは雑用係。土方さんはスツタフで。」

（この笑顔には反抗できないんだよな・・・。）

「ってことでいきますよ。」

そしてやってきたスナックすまいる。

「おりょうちゃん。」

辰馬がおりょうのもとに走り出す。
それをお妙が引つ張る。

「坂本さん。あなたの仕事はあつちよ。」

その笑顔にさすがのKYの辰馬も顔を引きつった。

「さあ。銀さんたちも着替えてきて。」

お妙に引つ張られ銀時たちも着替えにいく。

出てきた銀時たちを見てお妙がびっくりする。

「なかなか似合ってるわね。」

沖田と柚兎と山崎と陸奥はなかなか似合っている。
神楽は前よりマシになっている。

銀時とツラと新八は似合うも女ぽくない。

「柚兎オメー……。女じゃねえーか……。」
「銀時……。お前はなんかヤダ。」

柚兔は笑顔で言った。

「ヤダとはなんだ？」

「簡単に言うとヤダ。」

また笑顔で言った。

「簡単に言ってねえよ。」

「柚兔、俺はどうだ？」

ヅラが聞く。

「うーんキモイ。」

またもや笑顔で言う。

「柚兔・・・キモイとはなんだ？」

「だーから。キモイ。」

ヅラは少しショックだったらしく壁の方でへこんでいる。

「ま、キモイの当たり前ですぜい。」

沖田はヅラの姿を見て言った。

山崎も引いている。

「どこがキモイのだ。」

「全部じゃき。」

陸奥が表情を変えずに言った。

「ま、べつにいいアルヨ。キモイのは元からアル。」

「リーダー、それはないだろ。」

「いいアル。失うものなんてないでしょ。」

毒舌の神楽。

「あるよ。俺の何か失うよ。」

「口げんかしないで準備してね？殺すよ。」

お妙が言う。

「銀時なんか聞こえるぞ。お妙さんの口からとてつもない言葉が聞こえるぞ……。」

柚兔が始めて引きつった笑顔を見せた。

「聞き流せ……。つつこんだら殺されるぞ……。」

銀時も顔を引きつらせている。

「じゃあ。はやく準備してね。」

「はい……。」

第八訓 笑顔にも種類がある（後書き）

どうでしたか？

銀時たちのキャバ嬢姿はというと。

銀時・・・いつものパー子

ヅラ・・・いつものヅラ子

神楽・・・吉原の時みたいの一つのお団子

新八・・・いつものパチ恵

柚兎・・・髪をほどいた感じ

沖田・・・前髪をあげて、髪を二つにしている

山崎・・・髪を二つ

陸奥・・・髪をポニーテール

沖田って縛れるほど髪あるのかな？

感想よろしくお願いします。

第九訓 兄弟って似るもんだ（前書き）

第九訓です。

オリキャラ二人目だすよ！！

第九訓 兄弟って似るもんだ

「やっと終わった〜!!」

店が開いてから約5時間。

銀時たちはキャバ嬢の仕事を手伝いなんとか終わった。

「客にもキモイ言われた・・・。」

ツラは壁にくつついてへこたれている。

「情けねえーな、ツラ。」

銀時が言った。

「旦那も人のこと言えないじゃねえーですかイ。」
「んなことねえーよ。」

銀時が反論した。

「アハハハハ。嘘はよくないき。」

「辰馬、黙れ。」

「お前らはいつまでたっても・・・変わらないね。」

柚兔が笑顔で言った。

その後、ツラと別れた万事屋一行と辰馬と陸奥に真選組は万事屋へと足を進めた。

「で、なんでオメーらもついてくんの？」

「一応警察なんだな。」

近藤はそう言い豪快に笑った。

「はい。そうですね。」

万事屋の方へ近づくと一人の青年が立っていることに気づく。

青年はこっちの方を見た。

暗く顔まではよく見えなかったが、真選組は驚いた。

どこか高杉に似ているところがあつたからだ。

「よお、銀時、辰馬、柚兔。」

真選組は刀に手をかけたが、銀時たちが驚かないところを見て刀から手を放した。

「なんでこうも久しぶりの人がやって来んのかな？てか、なんでここが分かった？」

銀時は青年に対して、警戒せずに聞いた。

「坂田 銀時って人知ってる？って聞いて、ここを教えてもらった。」

青年もあっさり答える。

「おい、万事屋。知り合いか？」

土方が聞く。

「ああ。攘夷戦争よりも前からの友人だよ。」

銀時が答えた。

「じゃあコイツも攘夷戦争に……。」

「まあな。ま、いったん入るか。ここじゃさみーしょ。」

そう言い銀時は青年を手招きして中へはいつて行った。

その後ろに真選組や辰馬たちが続く。

中に入って明るいところで見た青年は高杉にそっくりだった。
髪の色は紫で三日月の模様が描かれている赤い着物を着ていて、赤い眼をしている。

「自己紹介ぐらいしろよ。」

銀時が青年に言った。

「へえーい。俺、高杉 晋次。高杉 晋助の弟で23歳。」

「おとうとおおー!?」

真選組が声をあげた。

新八も神楽も驚いている。

「そう、眼の色以外と性格以外はそっくりだよ。」

銀時が言った。

そして晋次に向かって言った。

「で、何の用？」

晋次は一瞬顔を曇らせたが、真面目な顔になって言った。

「兄貴をどうにかしてくれ!!」

銀時と辰馬は顔を見合わせた。

「ヅラにも会いたかったんだけど、どこに居るか分かんねえし・
・だから銀時・・

兄貴を・・・なんとかしてくれよ!!」

銀時はため息をついて言った。

「はあ。アイツのことをなんとかしてって言われてもよ・・・今の高杉を引きずり出すのは・・・無理に近いと思うぜ・・・。」

「それは・・・そうだけど・・・。でも、兄貴が復讐しようとしたって・・・先生はそんな事望んでねえーんだ!!」

晋次は真剣な声で言った。

「ま、俺も少しは力になってやるよ。お前に任せたってお前弱いだろ? すぐ死んじまうしよ。」

真選組は呆然としていた。

辰馬はニコニコ笑っているし、柚兎もにやって笑っている。神楽と新八は啞然としている。

「じゃ、ヅラにも頼んで、高杉の居場所でも探してもらっわ。」
「よろしく頼むな、銀時。」

第九訓 兄弟って似るもんだ（後書き）

どうでしたか？

ここでオリキヤラ紹介ぱーと1

伊達 柚兔・・・25歳の175？。6月20日生まれ。

戦場の獅子と呼ばれた攘夷戦争の時に銀時らに並

ぶく

らい有名な攘夷志士。

夜兔と人のハーフ。

髪の色はオレンジで眼の色は青。

第十訓 確信はちゃんと理由がある（前書き）

第十訓です。

またオリキヤラ出ます。

そして・・・高杉初登場です。

第十訓 確信はちゃんと理由がある

「晋助イ」。

江戸のどこかにある船では一人の少年が声を上げた。
真っ黒な髪に、真っ黒な目の少年だ。

「おう。ちゃんと斬ってきたか？」

冷たい声が響いた。

「うん。ちゃんと斬ったよお。」

子供っぽい声だがその頬には返り血が付いている。

「はあ。元志は色々恐いっスよね。」

女性の声も響いた。

「そお？」

元志と呼ばれた少年は藤原 元志。
歳は14歳。

「いつか俺も元志と戦いたいなあ。」

「団長、やめときな。」

また子供っぽい声が響いた。

「ククク……。これからどうなんのか楽しみだ。」

冷たい声の主は冷たい笑顔を顔に張り付け言った。
元志は笑顔だ。

次の日の夜……。

真選組の屯所では土方、近藤、沖田が話している。

「また辻斬りかよ……。」

「高杉の仕業ですかねイ？」

昨日の夜、巷で辻斬りが発生。

そのことについて話しているようだ。

「どうだかな。だが可能性としては高いぞ。トシ、警戒を強めろ。」

「おう、近藤さん。」

ドンドン。

真選組に来訪者。

「誰だ？」

近藤たちがドアを開けるとそこに居たのは……。

「万事屋……。」「

「よお、昨日ぶりだな。」

銀時が言った。

「オメーら何の用だ？」

「いやー晋次が用があるってよ……。」

すると、銀時の後ろから晋次が姿を現した。

「あの、昨日の……辻斬りの件で……。」

真選組が顔を見合わせた。

その後、銀時たちを中に引き入れた。

「で、辻斬りがどうした？」

晋次は確信をもったように言った。

「たぶん、あの辻斬りは……兄貴の鬼兵隊の仕業です。」

真選組は驚いた顔見せている。

「おい。なんで確信できる。」

土方が鋭い声で聞いた。

「それは、俺が説明します。」

柚兔が言った。

「昨日の夜……すごい殺気がしたんです。その殺気が……高杉の殺気にそっくりだったんです。」

「おい、なんでお前殺気が分かるんだ？」

柚兎は笑顔で言った。

「夜兎は殺気に反応できるんです。」

その時だった。

柚兎が顔を曇らせた。

「どうした？」

「この殺気だ……。こっちに来てる。」

全員が驚いた顔をしている。

ドン！！

真選組の扉が開いた。

「さあーて。ひと暴れますか。」

第十訓 確信はちゃんと理由がある（後書き）

どうでしたか？

オリキャラ紹介ぱーと2

高杉 晋次・・・23歳の身長165cm。10月8日。

攘夷戦争では鬼兵隊の副官だった。

高杉の実の弟。

性格は高杉の反対で口数が多く、おおらかで、明るい。

そして、少しSまじり。

見た目は高杉に似ている。

眼の色は赤、髪の色は紫。

服は三日月模様の入った赤の着もの。

感想よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5184z/>

夜兎と人の血

2011年12月24日17時49分発行